

—ただキリストと共に歩む—

# 水戸無教會

編 集 半 田 梅 雄  
第 十 五 号

ころげ落ちる

半田梅雄

人がキリストに至る為の有力な手がかりは、イエスが眞の人生に御自身を示していることである。もちろん、それは我々と併列的な道德の師ということではない。イエスは

力は父なる神の国の大地である。もうころげ落ちようのないところである。そこはひろく平かである。そこには不思議と疲れがない。

努力によつてだんだん登つてゆく人格の階段の、途中にも頂上にもいない。人はむしろ、登りかけてはころげ落ち、登りかけてはころげ落ち、登りかけてはころげ落ちして、遂に足腰立たなくなつた時、ふと振り向くとそこに立っている一人の人を見るであろう。それがイエスである。彼はいきなりそのイエスの足にしがみついてしまう。そしてイエスの立っている場所に立つてみる。そ

彼はイエスがしたように、階段のところについて立つてみる。今まで気がつかなくなつたが、そこには凄まじい光景が展開されている。人々は押しあいへしあい一糶でも他人より高く登ろうとする。人の足を引張つて引張り下ろそうとしているかと思ふと、他方では人をけ落すことと懸命な者、甚い奴は人の頭を踏台にして登りかけている者がある。小さな子供、病人、老人も今はもうしがみつ

いている丈で精一ぱい。怨み、のろい、叫び、実にじつと見るに耐え難い光景である。半分程落ちかけた者は、イエスや救われた者たちに向つてこう叫ぶ。「手を引っぱつてくれ、私は一人で階段が登れないのだ」と。

しかし、そんなことを言つたつて無駄である。イエスは階段を登ることを断念した者の為に來たのだから。ところが人の世の教師の中には、こういう登山者の尻を押ししたり、手を引っぱつたりして、それがキリストの国に近づくことだと思つている者がある。彼はその人もろとも最後にころげ落ちて、滅びに至ることを知らないのである。

# サタンの陰謀と第二の試煉（イ）

ヨブ記研究（九）（2/156）

大森孝夫

ヨブはサタンを撃退しました。然しサタンの邪推は底を知らず、その執拗さは蛇と同じです。人間の罪を人格化したものがサタンだとか、自責的良心の人格化されたものがサタンだとか、あれこれ得意になつて理窟をこねまわしているのは自分がサタンの術中に陥つていながら、その力の強大さを知らないでいるのです。そしてサタンの執拗さ、力を一向に知らないというのはサタンの方でも安心して相手にしない程、神から遠い存在であることを示す証拠に外なりません。マタイ伝第四章

をこらして下さい。そこにはサタンが最も強く憎み、最も激しく試みた、と同時に彼が最も痛烈に撃破された例が記されてあるでしょう。勿論ヨブ記のいうサタンと新約聖書のサタンとは性質が若干異なりますが（本誌十号参照）本質は神を侮辱し、神に近づく間を阻止する点に於ては全く同一です。ですから彼は再度の天上に於ける会議でエホバの叱責を受けながらも、ずうずうしくこう文句をつけているのです。「皮をもて皮を換ふるならば人はその一切の有物をもて己の生命に換ふべ

し。然ど今なんぢの手を伸べて彼の骨と皮とを撃ちたまへ」そして次に、こゝぞとばかりサタンは皮肉満面、ほくそ笑みつゝ地上のヨブとエホバを指し、第一回の時と同じ確信を以て「然らば必ず汝の面にむかひて汝を誑はん」と言い放つたのです。「皮をもて皮を換ふ」という諺には大體二説があるようですが、この正確な意味を知らなくてもサタンの奴の言うことは判ります。「なるほど、ヨブは頑張りましたね。でもどっこい、そう簡単に問屋はおろしませんや。人間で命の惜しくないものはありませんからね。誰だつて自分の命のためとあればその代償として、持つている物全部を投出しますよ。ヨブが財産や子供をな

くしたことをやせがまんしているのも、自分の命には換えられないと思つているからなんです。へっ、人間ほど利己的で偽善的なものはありませんよ。あなたがつくられた人間でさぞ残念でしょうが、人間があなたを信ずるなんて言うのはありや嘘ですよ。どうです。ひとつヨブの命をおびやかしてごらんさい。死が迫ればさすがの彼も本音を吐いて、あなたを誑きますよ。わたしの勝利は絶対確実でさあ。」毒々しいサタンの言葉、世にこれほどの嘲笑、誹謗、侮蔑の言葉がありましたよ。うか。でも単に切歯扼腕、いきり立つ前に世のクリスチャンと自称している人々よ。静かに反省しあつてみようではありませんか。商売繁盛、飯

の喰種、社交々際、立身出世、家内安全、息災延命、安心立命、修養道德、自己満足、現実逃避、智的要求、社会改善、果ては文化的アクセサリー等々の目的でキリストを信じ、神を信じてはいないかどうかを。私たちはサタンに凱歌をあげさせてはなりません。私たちは例えから、一粒ほどの信仰であつても、純一な信仰を神にさゝげ、絶対にサタンをしてかゝる毒舌を吐かしてはならないのです。愚なる人やサタンの無知の言、侮辱の言を止むるのは神の御意なのです。(ペテロ前二の15)こゝに於てエホバはサタンに厳然と申渡されました。「よしそれならば試してみるのがいい。彼の骨と肉とを打つことをお前の手に任せ

る。しかし絶対に彼の生命を奪つてはならぬぞ。」これら天上の間答によつて愈々第一回の試煉以上の大試煉がヨブに下つたのです。今度こそはとほくそ笑みつゝサタンはヨブの骨と肉と目がけては、つしとばかり業病の大鉄槌を振り落しました。嗚呼、気の毒なヨブ！因果応報、功利主義の世にあつて彼は再度に亘る災禍が如何なる理由に基くのか全然示されていません。天上の会議の模様を知る私たちには、彼の今後の大苦悶を想う時、心から憐察、同情の念を捧げて止みません。本當にヨブは哀れです。然し彼ほど幸福なものはないと思ひます。(誤解しないで下さい。私は安易、軽率に幸福という言葉を使ったものではありません)

ん)何故なら彼は神の僕として、神の栄光のために用いられて、奉仕しているからです。私たちが人間にとつてこれにまさる光榮、幸福はありません。どうか。絶対にありません。実にヨブは利益を離れて、純粹な内的動機から神は神御自身の故に拝すべきであることを立証せんがために用いられているのです。而も恩恵なるかな、神は「己れの生命を害ふ勿れ」と命ぜられました。エホバの愛と守りは常にヨブの上にあるのです。誠に「神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや」(ロマ8・31)であります。ヨブは必ず勝ちます。サタンは必ず敗退します。皆さん！己の罪を悔改め、キリストを信ずる信仰によつて義とされた者に対

し、サタンは入信以前より一層執拗に迫害してきます。然し挫けてはなりません。勝利はヨブと共に私たちに在るのです。苦しみの中からヨブの如く神に肉迫していきましよう。「信仰によつて、義とせらるゝ」とは新約も旧約も共に相貫くところの大眞理であります。

#### 附記

妙高に於て矢内原先生はガラテヤ書の光でヨブ記を見ると「信仰による義」ということがよくわかると御教示下さいました。誠に然りであると思ひます。

両書をご併読ください。

# ベテスダの出来事

石原秀志

エルサレム南郊ベテスダの池に集まつて来た多くの人々。東からも、西からも、聞き伝えて遠く且困難な道程をさまさまの苦勞を続け乍ら漸くにして此処迄辿りついた人々――病者、盲人、足なえ、瘦せ衰えた人々の群れ。凡ゆる犠牲を払つても彼等を此の池に迄導き集めたものは一体何であつたらう。

それは唯一の願、水の動く時への期待の故であつた。もしも此の静かなベテスダの水が激しく揺れ動く時が来るならば、そしてその動きつゝある水に浴するならば、その時こそは彼等を捉えていた長

にも拘らず、此等の唯期待にのみ生きる人々の間にも恵の機会の獲得をめぐつて激しい競走があつた。機会は幾度となく繰返して与えられる。併しその時々、その機会をつかみうるものは限られていく。此の夥しい人々は健康な人間から見れば、正しく社会からの脱落者に外ならない。しかもその脱落者達の間に、尚此のような生きんとする為の競走が起つているのであり、その競走に敗れてしまつた者は何時も更に残された機会をあてにするより致し方ないのである。かくて三十八年病み続けた此の者は、そのような競争からも何時も完全に取残されてしまい、常に落後者としての苦惱と悲しみを味わねばならないので

あつた。脱落者たちの間にあつて尚且落伍者となるという事の耐え難さ、折角此の所迄辿りついて救いの恩恵に浴する機会を目の前にし乍ら、いつもその恩恵から見放されてしまつている人間！

けれども此のような最も後にある者の為に、生命の主はその手を差し伸べようとして、天より降り給うたのであつた。凡ての病者達は御使が降り来つて此の池の水を「ゆり動かす」時に、全く新しい事が出現することを知つていた。然るに今、此の病者の前に来り給うたのは天の使ではなくて、神の子御自身である。此の神の子の御言が彼の全身に臨んだ時に起つた「ゆり動き」の強さは到底あの池の水のその及ぶ所では

なかつた。「癒えんことを願うか」との同情に満ちた御言に対して、此の男は主に対する信頼と心よりの訴えとを以て答えた。「起きよ、床をとりて歩め」という驚くべき御言が彼の上に臨んだ。その激しい御言に忽病者は躍り上り、床を担つて歩み出したのであつた。

此の世にあつて最も無力なる存在、ベテスタの回廊に群り待つ人々の間にあつて、池の中に浴しうる最後の人間、そのような者にこそ主の顧みは豊であつた。そしてそのよなギリギリの状況に立たされた病者の生命の主に対する切なる信頼と訴え、之に対して主は鮮かに応え給うたのである。「かくの如く後なる者（最後の者）は先に（先頭

に）なり、先なる者は後になるべし」（マタイ二〇・一六）

## 我ら何をなすべきか

―使徒行伝研究―

二章三七節～三八節

半田 梅雄

前回学んだ通りペテロの演説によつて、人々は深く心をさゝれた。それはペテロの演説が、イスラエルの歴史を貫いている神の御計画を明らかにしたと同時に、「君たちが十字架につけたイエスこそ待望のキリストであり、私たちの主なのだ」ときつぱり言い渡されたからである。彼らはイエスが救世主（キリスト）であるとは考えなかつたし、考えたくなかつたのである。

なぜなら当時のイスラエルを支配していたキリスト来臨の期待は、一人のみすぼらしい説教者や貧乏大工の小倅などの姿で現れる筈がなく、古くから言われて来た通り、ダビデ王の子孫である以上、現実の王者として堂々たる容姿で現われ、その超人的な権力をもつて、イスラエルの敵を一挙に滅すように考えていたのである。だからたまたまいエスがみすぼらしい風彩で、律法を批判するような様子を示すと、彼らは忽ち、彼は偽預言者、律法の冒読者だという扇動者の口車に乗つたのである。そしてイエスを十字架につけた。罪なき義人を十字架につけた。それを今あらわに指摘されて、彼らは自分たちが如何に馬鹿で間抜けで、欲

ばりで、内容より見せかけばかり気にする人間であるか思ひ知つたに違いない。又ペテロの指摘は単なる事実の註釈ではなく、歴史と現実の中心をぐさち突き通す眞理者の権威に満ちていたことも争う余地がない。本研究の第一講から学んできた通り、これこそ聖霊を受けたもの、眞の姿である。聖霊の賜物を受けた時に、人はどんな無智、弱虫であつても、眞の智者、眞の勇者となることができる。勇者とは百万の敵を前にしてびくともしないものを指すのではない。むしろ人が見せかけの平和の中で、妥協と、迎合と、お追しように日を暮す時、神を信ずる故に、日々破れながら尚究極の勝利を信ずる者である。智者とは多くの

事がらを知っている者のことではない。むしろ人々がパンがなければ生きられない、長いものに巻かれるのは仕方がないという時、神が愛であり、神の愛が萬物を生かすことを信ずる者のことである。

だから眞の勇者は、眞の智者であり、眞智が眞勇であるのはこの故である。しかもこれは、努力によらず、行為によらず、唯イエスがキリストであることを信ずる信仰によつてすべての人に与えられる賜物なのである。

この意味に於てペテロは眞の勇者であり、眞の智者であつた。眞勇眞智の者の言葉は、鋭き刃物以上に人の心をさす。人々が色を失い、「では私たちはどうすればよいのか」と絶望的なうめきを発す

るのは極めて当然である。これに対するペテロは、決して無責任な風刺家でも、単なる皮肉屋でもなかつた。イエス・キリストを十字架の死より復活せしめた方が、弱い人間ペテロにも永遠の勝利を約束された如くに、信ずるすべての人に眞の救いとあわれみが及ぶことを彼は信じていた。打てば響くように、彼は言下に応えた。

「悔い改めなさい。そしてあなたがたひとりびとりが、罪のゆるしを得る為に、イエス・キリストの名によつて、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖靈の賜物を受けるであろう。云々。」

これがキリスト教の基礎である。しかし、このペテロの

言葉程誤り用いられる例も又少ないように思う。これを一読しても別に難しいところはない。しかし、これを再読し更に具体的に各自の信仰経歴をふり返つてみると、その一つが、決して容易なわざでなかつたことに気づくであろう。

しかし、難しそうで易しいのが福音の福音たる所以である。難しくするのは学者であり、この世の論者である。信ずるすべての人には、信じ得た時に既に神の知恵である。神の力である。次回に於てこの点をくわしく学びたいと思ふ。

それこそ

大変だ

塚本先生は、「先生に頼るな」と仰言る。幸か不幸か私たちは、先生を頼る機会に殆んど恵まれていない。然し、そのことが直ちにキリストに頼っている証拠にはならない。先生に対しては、即くでもなく、離れるでもなくて、済むかも知れないが、「われ汝の行為を知る、なんぢは冷たかにもあらず熱きにもあらず、我はむしろ汝が冷かならんか、熱かならんかを願ふ。かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微温きが故に、我なんぢを我が口より吐き出さん（黙示録三・一五）」とキリストより吐き出されたら、それこそ大変だ。

(半田)

昭和三十一年九月 発行  
水戸無教会第十五号

実費十円十共

編集兼印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原町

水戸幼稚園内 水戸無教会